

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事

ほんのうそくぼだい

こと

（煩惱即菩提の事）

しじょうきんごどのはんじ ほんのうそくばだい こと

四条金吾殿御返事（煩惱即菩提の事）

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

しじょうきんご

文永9年(72) 5月2日

51歳

四条金吾

にちれん

しょなん

おん

訪

いま

こころざし

ありがたく候。

ほけきょう

ぎょうじや

だいなん

遭

そうちう

悔

法華経の行者としてかかる大難にあい 候は、くやしく

思 そうら

しょう

受

し

そうちう

おもい候わず。いかほど生をうけ死にあい 候とも、こ

かほう

しょうじ

そうら

しょう

受

し

そうちう

そうら

れほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候い

いま

しょうじせつだん

ぶつか

得

み

つらめ。今は生死切斷し、仏果をうべき身となれば、よろ

そうちう

こばしく候。

てんだい でんぎょうとう しゃくもん り いちねんさんぜん ほうもん ひろ たも
天台・伝教等は、迹門の理の一念三千の法門を弘め給う
おんしつなん 遭たま にほん でんぎょう
すら、なお怨嫉の難にあい給いぬ。日本にしては、伝教よ
ぎしん えんちょう じかくとう そうでん ひろ たも だいじゅうはちだい ざす
り義真・円澄・慈覺等、相伝して弘め給う。第十八代の座主、
じえだいし みでし 数多 なか だんな
慈慧大師なり。御弟子あまたあり。その中に檀那・恵心・
そうが ぜんゆとう もう しにん
僧賀・禪瑜等と申して四人ます。法門また二つに分か
だんな そうじよう きょう つた
れたり。檀那僧正は教を伝う。恵心僧都は觀をまなぶ。
きょう かん にちがつ ほうもん ふた わ
されば、教と觀とは日月のごとし。教はあさく、觀はふか
だんな ほうもん 広 きょう 浅 えしん かん 深
し。されば、檀那の法門はひろくしてあさし。恵心の法門は
せばくしてふかし。
狭 深

いまにちれんぐつうほうもん

狹
甚

今、日蓮が弘通する法門は、せばきようなれどもはなはだ
ふかし。その故は、彼の天台・伝教等の弘むるところの法
よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事と
はこれなり。南無妙法蓮華経の七字ばかりを修行すれば、
せばきがごとし。されども、三世の諸仏の師範、十方薩埵の
導師、一切衆生皆成仏道の指南にてましますなれば、ふか
きなり。

きょう
い
しょぶつ
ちえ
じんじんむりょう
うんぬん

きょうもん

きょう
い
しょぶつ
じつぽうさんぜ
いっさい
しょぶつ
しんごんしゅう

経文に「諸仏」とは、十方三世の一切の諸仏、真言宗の
経に云わく「諸仏の智慧は甚深無量なり」云々。この

だいにちによらい じょうどしゅう あみだ ないしそしゅう しょきょう ぶつぼさつ
大日如来、淨土宗の阿弥陀、乃至諸宗・諸経の仏菩薩、
かこ みらい げんざい そうしょぶつ げんざい しゃかによらいとう しょぶつ と
過去・未来・現在の諸仏、現在の釈迦如来等を諸仏と説き
あ つぎ ちえ ちえ
挙げて、次に「智慧」といえり。この智慧とはなにものぞ。
しょほうじつそう じゅうによかじょう ほつたい
諸法実相・十如果成の法体なり。その法体とはまたなにも
なんみょうほうれんげきょう ほつたい
のぞ。南無妙法蓮華経これなり。釈に云わく「実相の深理、
ほんぬ みょうほうれんげきょう
しやく い
本有の妙法蓮華経」といえり。その諸法実相といふも、
しやか たほう にぶつ 習
しょほう じつそう
釈迦・多宝の二仏とならうなり。諸法をば多宝に約し、実相
しょほうじつそう
をば釈迦に約す。これまた境智の二法なり。多宝は境なり、
しやか ち
きょうちに に
たほう やく
きょうち にほう
たほう やく
きょうちふに ないしよう
釈迦は智なり。境智而二にして、しかも境智不二の内証な

だいじ ほうもん

り。これらは、ゆゆしき大事の法門なり。

煩惱即菩提・生死即涅槃といふも、これなり。まさしく

男女交会のとき、南無妙法蓮華経ととなうるところを煩惱

即菩提・生死即涅槃といふなり。生死の当体、不生不滅と

さどるより外に、生死即涅槃はなきなり。普賢経に云わく

「煩惱を断ぜず、五欲を離れずして、諸根を淨め、諸罪を滅

除することを得」。止觀に云わく「無明・塵勞は、即ちこ

れ菩提、生死は、即ち涅槃なり」。寿量品に云わく「つね

に自らこの念を作す。何をもつてか衆生をして、無上道に

い　すみ　　え　　ほうべんぽん
入り、速やかに仏身を成就することを得しめんと。方便品
い　せけん　そう　じょうじゅう　とう　　こころ
に云わく「世間の相は常住なり」等はこの意なるべし。
かくのごとく、法体といふも全く余にはあらず、ただ
なんみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華経のことなり。

ほつたい　まつた　よ
尊　　ほけきよう　かこ　膝　　下
置　　かこ　　かこ　膝　　下
かかるいみじくとうとき法華経を、過去にてひざのした
におきたてまつり、あるいはあなずり、くちひそみ、ある
いは信じ奉らず、あるいは法華経の法門をなろうて一人
をも教化し法命をつぐ人を、恶心をもつてとによせかくに
よせおこづきわらい、あるいは「後生のつとめなれども、
寄　　きょうけ　ほうみよう　続　　ひと　あくしん
痴　　痴　　痴　　痴　　痴
笑　　ごしそう　勤　　勤　　勤

まず今生かないがたければ、しばらくさしおけ」なんどと
無量にいいうとめ、謗ぜしによつて、今生に日蓮種々の
大難にあうなり。諸経の頂上たる御経をひきくおき
奉る故によりて、現世にまた人にさげられ用いられざる
なり。譬喻品に「人にしたしみつくとも、人、心にいれて
不便とおもうべからず」と説きたり。

しかるに、貴辺、法華経の行者となり、結句大難にもあ
い、日蓮をもたすけ給うこと、法師品の文に「化の四衆、
比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を遣わして」と説き給う。

なか

う ばそく

き へん

誰

指

この中の「優婆塞」とは、貴辺のことがあらずんばたれをかささん。すでに法を聞いて信受して逆らわざればなり。

不思議や、不思議や。もししからば、日蓮、法華経の法師な

ること 疑いなきか。「則如來使（則ち如來の使いなり）」

にもにたるらん、「行如來事（如來の事を行ず）」をも行
ずるになりなん。

たほうとうちゅう

にぶつひょうざ

とき

じょうぎょう

ぼさつ ゆず

たま

多宝塔中にして二仏並坐の時、上行菩薩に譲り給いし

だいもく

ごじ

にちれん

弘

もう

すなわ

じょうぎょう

題目の五字を、日蓮ほぼひろめ申すなり。これ即ち上行

ぼさつ

おんつか

きへん

にちれん

ほけきょう

ぎょうじや

菩薩の御使いか。貴辺また日蓮にしたがいて法華経の行者

しょにん

たも

るつう

として諸人にかたり給う。これあに流通にあらずや。

ほけきょう

しんじん

通

たま

ひ

切

休

ひ

法華経の信心をとおし給え。火をきるに、やすみぬれば火

得

ごうじょう

だいしんりき

出

ほつけしゅう

しじょうきんご

をえず。強盛の大信力をいだして、「法華宗の四条金吾、

しじょうきんご

かまくらじゅう

じょうげばんにん

ないしにほんこく

いつさいしゅじょう

四条金吾」と、鎌倉中の上下万人、乃至日本国的一切衆生

くち

謳

たま

惠

な

なが

善

な

の口にうたわれ給え。あしき名さえ流す。いわんやよき名を

や。いかにいわんや法華経ゆえの名をや。

にょうぼう

よし

な

にちがつ

りょうげん

双

女房にもこの由を云いふくめて、日月・両眼・そうの

翼

ととの

たま

にちがつ

めいど

りょうげん

つばさと調い給え。日月あらば、冥途あるべきや。両眼あ

さんぶつ

げんみょうはいけんうたが

らば、三仏の顔貌拝見疑いなし。そのつばさあらば、

じやつこう

ほうせつ

と

しゅゆ

せつな

くわ

寂光の宝刹へ飛ばんこと須臾・刹那なるべし。

委しくはま

もう

そうちうう

きょうこうきんげん

たまた申すべく候。

恐惶謹言。

ごがつぶつか

五月一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

四条金吾殿御返事